被爆者に寄り添う

2014.5.24

土田和美

5年前から被爆体験を語るようになりました。聞き手は学童の子どもだったり、高校生だったり、大人であったりします。

核廃絶に向けての私のスローガンは"世界のお母さんを泣かさないで"

私は、4才11ヶ月で少し年上の男の子と半田町で被爆しました。配給の牛乳を二人で受けとりその帰り道でした。彼は火傷を負い私は無傷でした。「何せ私は無傷だったのだろう。」

父は、爆心地1.5キロの辺り(竹屋町)で被爆し真黒になって家に戻って来ましたが、1ヶ月後に苦しみ抜いて原爆症で亡くなりました。

「父は何せ原爆で死ななければならなかったのか。」

証言の準備をする時、私はいつも自問自答しながら、涙が出てきます。火傷を負った彼は、その後どうしただろうか、どんな人生を送っているだろうか。差別や病気や、さまざまな事で苦しんでいなかっただろうか。

そして、又、母の事を思うのです。乳のみ児を含む4人の子どもを抱かえ女手ひとつで生き抜きました。母が晩年、私に言った言葉が忘れられません。

「美大に行かせてあげたかった。」　私の心の中を見ていたようなこの言葉に、母の哀しみを知りました。母は幾度も幾度も泣いた夜があったに違いありません。

又、証言の準備の中で、顔のつぶれた女学生らしい写真を見ていると、この女学生は、カメラのファインダーに向かって、ゆずかに手を上にあげているのです。

「何せ、私は、こんな目に遭わなくてはならないの、助けて下さい。」

原爆で亡くなった20万人ひとりひとりの無念に寄り添い核のない世界を目指します。

私の被爆体験（公開用）

H26,5 再作成

堤　達生

皆さんご存知のように今から（６９年前）の昭和２０年８月、広島市と長崎市に人類史上初めての原子爆弾が投下されました。私が住んでいた広島市はわが国中国地方最大の都市ですが、ただ一発の爆弾で街は廃墟となり、その年の年末までに当時の人口４２万人の３人に１人、約１４万人が死んだのです。今日はそのときの私の体験をお話します。

私はそのとき、広島市立大手町国民学校の５年生でした。前年の１学期まで東京の国民学校に居たのですが、アメリカとの戦争に日本がだんだん負けてきて、Ｂ２９というアメリカの爆撃機が日本の大都市の上空へやって来て爆弾を投下するという事態が予想されたのです。そこで東京の国民学校の３年生以上を田舎の学校へ疎開させるということを政府が決めたのです。それが学童疎開です。

このため、私は昭和１９年の８月に両親の故郷の広島市内の大伯母さんのお宅へ家族と離れて１人で疎開してきました。原子爆弾が落ちる１年前のことで、まだその頃は広島は安全だといわれていたのです。

原子爆弾が落ちた８月６日は朝からカンカン照りの暑い日でした。私は朝８時から近所の日本赤十字病院の近辺の家屋疎開の跡片づけに動員されていました。家屋疎開というのは公共の建物を火災の類焼から守るために建物を間引きして空き地にするということです。

８時に現場に着いて間もなく、一緒に跡片づけをしていた伯母（母の姉）に家に帰ってざるを取ってくるよう言われ、一旦家に帰りました。家屋を壊した廃材を薪の代わりに貰えるというのでその入れ物であるざるを持って来るということでした。家に帰り、暑いので台所の庇の下で涼んでいたときでした。ブーンという爆音がしたので、空を見上げた瞬間、ヒューという音がした直後、辺り一帯を覆い尽くす猛烈な爆発音がした。ドーンでもないガーンでもない、想像を絶する、言葉で表現できない音だった。
原爆のことをよくピカドンといいますが、外から聞けばドンですが、その音の中に自分がいたのです。

瞬間的に勝手口へ逃げこみました。逃げ込んだのか、爆風で吹き飛ばされたのか、はっきり覚えていませんが。体を曲げて上半身を伏せていた。大伯母さんが私の上から覆いかぶさってくれていました。しばらくは爆風の凄まじい風と、土ぼこりと瓦や壊れた家屋の破片のようなものが猛烈な勢いで空中を舞っていたのです。例えていえば竜巻の中心にいるような状況だったのでしょう。

何１０秒たったのか１分以上たったのか憶えていませんが、爆風が治まったので身を起こしてみると、住んでいた家は天井が落ち、ガラスは飛び散り、壁は落ち、戸は倒れ、それでもＨ型に建てられた新しい頑丈な家だったので、土台と柱は原形のまま保たれている。しかし、外へ出てみるとその辺は爆心地から１．５キロも離れているのに近所の家は家屋全体が傾いていたり、土台から崩れていたりしているのです。あまりの凄さにしばらくは呆然としていました。昨日まで一緒に遊んだ子の居るその家々から誰も人が出てこない、シーンとしている。その上さっきまで晴れていた空がいつのまにか曇っているのです。

当時の国民学校生は爆弾とか、焼夷弾についてあるいは空襲の時の避難の仕方について普段から学校で教わっていました。しかし想像していた空襲とはぜんぜん違い、爆発は１回なのにこの破壊のすさまじさに仰天し、これは現実なのか、夢をみているのではないか。そのような気持ちでその場に立ち尽くしていました。

そのうちに倒れた家から火の手が上がってきたのです。ぐずぐずしていると火災に巻き込まれてしまう。大伯母さんが私に「長靴をはいて早う逃げんさい。海のほうへ逃げるのよ」こう言って急かしたのです。私は茫然とした状態のままで持って逃げる非常用品など全然忘れ、着のみ着のままで家から離れた。

広い道路へ出て見ると、驚いたことに、衣服が焼け、皮膚が剥けてぼろ布のようにぶら下がって、黙々として海の方向へ逃げて行く人が大勢居るのですね。この人たちはどこから来たのだろう。どこに居たのだろう。まるで別の世界から来た人間のようだ。さっきの爆弾でこんなことになっているのか。現実とは思えない白昼夢を見る思いでした。このときの光景は、戦後、話でいろいろと伝えられ、絵にも描かれているとおりの有様だった。丸木位里さんという原爆の絵を描いた画家が居ますが、その絵のとおりなのです。

海岸へ逃げていく途中、黒い雨が降ったため、防空壕でいっとき雨宿りしました。５分か１０分くらいだったでしょうか。黒い雨が止むと青空が漸く戻ってきました。さらに歩いて海岸まで辿り着きました。海岸から市街の方を振り返ると、方々で大きな火災が起こっており、絶え間なく爆発音が聞こえてくる。おそらく工場で何かに引火しての爆発音だったのでしょう。家のほうへ戻れる状況ではなかったのです。仕方なく暑い海岸でしばらく海に浸かったり、血で汚れたシャツを洗ったりしたのを憶えています。

学童疎開で広島へ来て１年、１０歳だった私は、家族とは離れて寂しかったのですが、大きな家に住み、川で釣りをしたり、親切な大伯父さん、大伯母さん、あるいは母の姉一家の人たちに囲まれ、東京よりも食糧事情のよいここで過ごした１年は、ある意味で愉しい日々でした。ですが、今日の出来事ですっかり変わってしまった。そのとき、朝から夕方

まで居たそこで、こんなことを考え、呆然としていたのです。

翌日、住んでいた家まで戻ってみると、やはり家は丸焼けになっていて、自分の勉強道具もすべて無くなっていた。仕方なく広島市郊外の草津町にある遠い親戚を頼ることになった。千田町から市街を通って己斐駅というところまで歩いた。途中、建物はほとんど焼け落ちて、今まで慣れ親しんだ街が見る影も無くなっている。電線がぶら下がっている電車通りを避け、川ふちを歩くと、黒焦げの死体が、裸または筵を掛けられて累々と横たわっておりました。一様に体は真っ黒で歯だけが真っ白なのです。

８月１５日草津町で終戦を迎えた私は、家屋疎開の現場でそのまま作業を続けていた伯母を見舞いに行った。伯母は全身大やけどを負い、国民学校の階段の踊り場に寝かされていた。傷跡は正視できない状態だった。この時伯母は私に言った。「うちはあんたの身代わりになってあげたんよ」可愛がってくれた伯母のこの言葉はそのあとずっと私の胸の中に残った。伯母の子供は４人居り、この年１０月に母のいない兄妹になってしまった。

私はこのあと父が迎えに来てくれて、その年の９月末に逗子へ引っ越してきて親兄弟と合流し、逗子国民学校５年生に編入学しました。

現在、逗子市が核兵器廃絶と平和の尊さを訴えるピースメッセンジャー事業というのがありますが、平成１４年にそのピースメッセンジャーと一緒に広島へ行って、平和記念資料館を見学しました。そこで被爆者が描いた原爆の絵が展示されていた。その絵のひとつに学校の校庭にこどもが数十人同じ方向を向いて倒れ、校舎が恐ろしい勢いで燃え上がっているのがあった。絵の説明に「この絵は被爆直後の大手町国民学校です」とある。私の母校でした。８月ですが、その年はまだ夏休みになっていなかった。私はその日、学校を休んだけれども、学校ではその時間は校庭で朝礼をしていたのです。平和記念資料館でこの絵を見たとき、原爆から５７年経っていましたが、母校のこのときの様子が初めて分かったのです。

これより前、平成８年、会社を定年退職したのを機会に私は核兵器廃絶と、平和の追求に努力している先輩に敬意を表して、被爆者の会に入りました。その中で原爆展を開催したり、小中学校で被爆体験の話をしたり、ピースメッセンジャー事業に参加し中学生にアドバイスを送ったりして、核兵器の恐ろしさを伝え、平和の尊さを訴える活動をしています。

被爆体験を聞き、また原爆展を見学した小学校生も中学校生も一様に「原爆は危険なもの、一刻も早く無くしてほしい」「唯一の被爆国である日本が行動して欲しい」「大人になったら核兵器の廃絶運動をしたい」などの感想を寄せています。

NO1

私は十八才の時原爆にあいました

七十年前の八月六日は真夏の太陽がギラギラ輝きとても暑い日でした

毎日空襲警報発令・警報解除のくり返しで青空の下アメリカのB29の飛行機はいつとはなく施回していました　私は観音国民学校につとめておりました。空襲警報発令中でも職員は勤務する事になっていたので、広島市中区の家を出て、市内電車で観音町へと向いました。車窓から見た今の十日市で、大勢の人が縄を引っぱって、建物を壊す作業をしてけむりがもくもくと上っているのを見ました。学校では朝礼をして、学校に残る者、出かけ者とに分かれます。学校に残った人はほとんどが全滅でした。私は二人の教師と近くの児童を集めて勉強するため、西観音の集会所へ行きました。空襲警報発令中なので児童は家で待機しています。八時十分頃だと思いますが、警報解除になりました。児童を待つため、黒板に八月六日と

NO2

書きました。もう一人の教師が「B29が飛んどるよ」と言って窓から顔を出したと思います。その時、大音響と共に天上の板が頭に落ち、床下からけむりがまい上り目や口をおそい何も見えません。窓を見ていた教師に直撃弾が当ったと思いましたが、もう何もわからなくなり、苦しくてこのまま死ぬと思いましたが、私は道路のアスファルトの上にとばされていました。そとはうす暗くて人の影がやっと見えるぐらいで、アスファルトは水をまいたようにビショビショの中を歩くようで、服はやぶけて裸に近く、皮フがはじけたようでガラスが足につきささって血だらけになりました。直接爆弾に会った人でしょうか、背中の皮フがむけて足の方にたれ下り赤身が出ている人もいました。まわりの人はみんなやられているので助ける人はいませんでした。「水・水」と言って泣いている人、顔は黒く煤がついたようです。どんどん人は歩けなくなっていきます。南観音あたりは家はこわれても焼けなか

ったので、そこの父兄の人に助けてもらいました。八月十五日の終戦の日までお世話になりました。その間広島市内は昼夜を問わず、夕焼けのように一週間以上もえ続けました。こんな悲劇が起こるのが人間の犯した人的行為です。こんな恐しい核兵器を持っていると、固持して脅かす材料にはなりません。地球がなくなるかもしれません。一瞬に太陽もかくれ、明るい日ざしが雨に変わります。晴天が黒い雨に一変するんです。こんな悲劇を起こさず、与えられた命を、全うする意見をみんなで出し合っていく事を祈願し、次の世代の人は核はいらないとさけんで下さい。すさまじい悲劇が起こるだけで、何の解決にもなりません。核はすべてのものを全滅させるという事を強く胆に銘じてほしいと思います。

1.　　平成26年5月19日,

「被爆体験談や平和への思い。」

登世岡　浩治

私は、旧制の中学校4年生で、年令15才の時、被爆いたしました。

当時の中学生は、学校で授業を受けることもなく、軍需工場などで、軍需用品の製作に従事したり、農作業の奉仕活動に、動員されておりました。

各校の1年生の殆どは、疎開家屋の倒壊作業に従事しておりました。そんなことで、中学生の被爆は、広範囲にわたり、特に、1年生は、屋外作業をしていたため、甚大な被害を受けております。

私は、鉄骨造の広大な工場内で作業をしていたため、幸いに傷1つ負うこともなく助かりました。帰宅途中、放射能を含んだ黒い雨に遭い、ずぶ濡れになりましたが、これまた余り影響を受けることなく、今日まで、生き長らえさせて頂いております。

被爆から69年経過しましたが、不幸にし

2、

て亡くなった、知人、友人のことを偲ぶと、未だに堪えられない気持になります。

私は、原爆資料館を、今まで、1度も見学したことがありません。それは、恐らく、陳列してある資料に目を向けると、当時の地獄図が想い出され、たまらなくなるからでしょう。しかし、被爆に全く関係のない方々には出来るだけ見学して、当時の悲惨な状況を知ってもらうよう、勧めております。

被爆69年を迎える現在は、経済的に急成長し、世界屈指の経済大国となり、平安な毎日を送れるようになりました。そのことが、あたりまえとして受けとめられ、被爆犠牲者の方々に、思いを馳せることもなく、贅沢三昧に耽っている現状は、誠に由々しいことと云わざるを得ません。想像を絶する多くの犠牲者のお陰により、今日の安らかさがあることを思う時、折にふれて、追悼の思いを抱き、合掌させてもらうことが、大切だと思います。

3、

沖縄で、身内のお方が戦死された、あるお方が、「千萬の、いのちの上に築かれしたいらけき世を生くる悲しさ。」と、歌っておられます。戦争犠牲者のことを、しみじみ味あわせて頂くことです。

兎角、人間は、我執の心が強いために、自己主張をしようとして、そのために人を傷つけ苦しめていることに気づかず、更には、怨み、憎しみを抱くことが多いように思います。一人一人が、相手の立場を考え、人と人とのふれ合いにより、生かされていることの有難さを感じ、慈愛の心、尊敬の念を抱いて行きたいものです。先ず、そのことが、世界平和実現への第一歩ではないでしょうか。

仏典の中に「怨みに報ゆるに怨みをもってすること勿れ、怨みに報ゆるに慈悲をもってせよ。」のお言葉があります。慈しみの心を抱いて行けよと、ご教示頂いている気がいたします。平和！それは、皆さんと共に生きる世界なのです。

（終）

平成26年5月1日

平和宣言に載せる「被爆体験談や平和への思い」

〒[redacted] 山梨県南都留郡鳴沢村[redacted]
中 島 辰 和

「被爆者として次の世代に伝えたいこと」

広島で被爆し69年経ち、当時10才だった私も79才になりました。現在、山梨県原水爆被害者の会の事務局長として核兵器廃絶の活動に努めています。

残念ながら核兵器廃絶への道はまだ遠く感じます。核兵器廃絶を求める声が世界の指導者たちの心を動かすに至っていないのです。被爆者の平均年齢が80才を越えた今、あの日に始まり終わりがわからない、悲しく苦しい被爆の経験を広く世の中の人たちに知らしめて行こうとする力も徐々に弱まっています。

私たちは、私たち被爆者の悲願を一番よく知っている私たちの子供たちに、被爆体験の語り継ぎを託すことにしました。私たちの命が終わりを迎える前に私たちの願いを可能な限り語り継ぎたいと思っています。

大変嬉しいことに、私たちの子供たちは私たちの意を酌んで被爆体験の語り継ぎをすることを望み、前進することを被爆二世の使命と信じてくれています。貴重な被爆体験の語り継ぎが親から子へ、子から孫へと伝承されることを願っています。

被爆体験記

私の父は職業軍人でした。中国戦線に派遣されました。そして、負傷して現地の赤十字病院に入院しました。そこで従軍看護婦として働いていた母と知り合い結婚しました。そして、私が生まれました。

１９４２年（昭和１７年）に、父は再度中国戦線に送られました。広島の手島隊でした。匪賊が出たということで出動し頭を撃たれて死亡しました。遺体は現地で荼毘にふされて、血のついた布きれだけが帰ってきました。私が１歳のときです。父の顔は、写真で見るだけでした。

１９４５年（昭和２０年）８月６日の日は、よく晴れて雲ひとつない日でした。一度、空襲警報がでたのですが、解除されました。そのため、母は、私が外で遊ぶのを許可したのだと思います。近所の子供だけ８人でよく遊んでいたのですが、その日は、隣の女の子が出てこなかった為、みんなで迎えに行きました。玄関から呼びましたが、お父さんが出てきて「今日は、具合が悪いから遊ばない」といいました。みんな当惑して、しばらく、そこにたたずんでいました。そのうち、一番リーダーの男の子が道路に飛び出し自宅の方へ走り出しました。みんなも走り出しました。私もいちばん最後に走り出しました。５～６メートルも走った時、左後方がピカッと光りました。左後方を見ると落下傘みたいな物が見えました。なぜか、また前を見て走ろうとしました。その時爆発音が聞こえました。爆風が来たのでしょうが全然おぼえていません。そこにたたずむだけでした。壊れた入口の門の間から母が飛び出してきました。ちょうど家の前は工場の焼跡があり、工場跡と道路の間に、水たまりがありました。母は、子供たちをその水たまりに入るように手招きしました。他の子供は入りましたが、私だけ足が進みません。母が「どうしたの」と聞いて私を抱き上げようと、私の足をさわった時、母の手がヌルッと滑りました。母はビックリして「何これ」と叫びましたが、私を抱き上げて水たまりの中に入りました。そのうち雨が降り始めました。いわゆる黒い雨ですが、その時は夏でもあり気持ち良いぐらいにしか感じていませんでした。すると、男の人が「この雨に濡れたらだめだ」と叫んで通りました。自分の身も顧みず、本当に奇特な人だったと思います。この人がいなかったら、いつまでも黒い雨の中にいたでしょう。

母は、それを聞くと、私を抱えて家の中に避難しました。家の住所は、広島市南観音町です。爆心地から２キロメーターの所でした。私の年齢は、４歳と４か月でした。幸い、家の中は避難する所があったのだと思います。私は、それきり生死の間を彷徨っていたんだと思います。

祖父、祖母は呉の焼山という山の中に疎開していて無事でした。母親が残って、私も一緒に行く予定でしたが、私が、駄々をこねたため、二人で疎開しま

した。広島は空襲らしい空襲がなかったため安全と判断したのかもしれません。実は、それがアメリカ軍の作戦でした。朝のラッシュアワーを狙って爆弾を落とし、その成果を見るのが目的だったのです。

祖父と祖母は、広島に新型爆弾が、落ちたと聞いて、帰ってきました。入市被爆ということになります。祖母は、私を見て、「この子はもう助からないだろう。」といったそうです。夏の暑い日でしたので、私は、シャツとパンツのみでした。厚手の服をきていれば、防げていたのでしょうが、シャツとパンツの光線の当たったところが溶けていました。左手のやけど、左足臀部から足先にかけてのやけど、右足後部の膝から下のやけど、左首から頭にかけてのやけど、しかし、頭の毛はあとから生えてきたそうです。ピースボートで、相部屋の方の体験を聞いたのですが、１６歳で、通勤途上で原爆を受けて、やけどをしたということでしたが、その人のやけどは、きえていました。１６歳ですと皮膚が、しっかりしているためだと思われます。私の場合は４歳でしたので、皮膚がやわらかかったため、やけどの度合いが強かったのでしょう、現在も、残っています。私は、１年ぐらいは寝ていたと思います。左足の膝の裏側のやけどのため、膝を曲げた状態で、くっついたままになっていたのを、お医者さんが無理に引き伸ばしたのを覚えています。母親は、幸いなことに家の中にいましたので、やけどはありませんでした。

私の母は、沖縄の中部、北中城村島袋の出身です。ここは、アメリカの第３隊が上陸したところです。母の妹は沖縄にいたのですが、先祖の墓の中に隠れて身を潜めていたそうです。赤ん坊が泣きやまないので、手で口を覆っていたら、赤ん坊は窒息して死んでしまったという話もしていました。母の弟は内地にいましたが、アメリカ軍が沖縄に上陸するというので、「自分は、男だから帰って皆を助けなければならない。」といって、鹿児島から船に乗りました。母と鹿児島まで送って行った記憶があります。アメリカの潜水艦に沈められたのでしょう消息不明のままです。

母と私は、宮崎に母の叔父がいましたので、宮崎の方が、食料事情が良いということで宮崎に行くことになりました。被曝で長いこと寝ていたためか、小学校に入っても給食が余りたべられなかった記憶があります。もっとも、当時の給食はアメリカ軍がくれた脱脂粉乳、味噌汁は菜っ葉だけという給食でした。運動会も小学校１年のときは、左手にやけどがあるため、左手と手をつないでくれません。しかし、２年生ぐらいになると、みんなも慣れて気にしなくなりました。小学校６年のとき、「原爆の子」という映画がきました。学校から見にいきました。映画を見ながら原爆が落ちた後、雨が降るんだと言ったら、映画の中でも本当に雨が降り出したので、隣の子はビックリしていました。

母親は、自転車で行商をして生計を立てていましたから軍人恩給が出るまで

大変だったと思います。家庭のことを考え、工業高校に進むことにしました。中学時代は、身長が伸びないので、白血病になるのではないかと、悩みました。

高校のときは、人と対話がうまくできないのになやみました。なぜか、人の名前を呼ぶのがはばかれました。高校２年のとき、体育館で担任の先生が「みんな何か発表しなさいと言うので「私は、原爆を受けました」と言って、被爆の状況を話しました。何か、聞かれるかなと思っていましたが、遠慮したのか質問はありませんでした。

就職試験のときは、なぜかスランプになりまして、大きな会社は落ちてしまいました。大分市のパルプ会社に就職しました。給料 8,000 円で下宿代 5,000 円という生活でした。差額 3,000 円から 1,000 円は母親に送っていました。１年目は、腹をすかす生活でした。たばこや酒と縁のない生活でした。超過勤務を１時間してもビール１本代にもならないくらいでした。

２年目になると、給料は 10,300 円ぐらいになりました。少しは余裕ができたのですが、今度は、ホームシックになり帰省の交通費で消えました。資格を取ろうと勉強をしたのですが、身体に無理をしたのでしょうか、寮の食事が食べられなくなりました。箸をとるときは、食べたいと思うのですが、いざ食べようとすると、食べられないという状況でした。母親がきて、どうも黄疸らしいということで、大分市内の[redacted]病院に入院しました。当時、大分県の[redacted]を女医先生がしていました。そこの[redacted]が、県の公務員試験を受けるということで、私にも受けるように言い、保証人になってくれました。翌年の３月に大分県に入るとき、背広の月賦が 13,000 円ぐらいありましたが、その金も貸してくれました。そういうことで、昭和 37 年３月 16 日から、大分県の発電所に勤務しました。その当時の公務員の給料は 8,000 円でしたが、山の中のため、手当てが給料の半分くらいありました。それで、息がつけました。

昭和 38 年 10 月に、宇目町と宮崎県の県境の桑原発電所に転勤になりました。山の中で、それこそ当時は、オゾンの発生するような所でした。放射能の内部被曝には、良い空気を吸うのがよいのですが、放射能を体外に出す作用があるそうです。山の中で勤務するうち食欲がもりもり出てきて、身体が元気になってきました。身体の中の放射能が、排出されたのでしょうか。食欲が出てきたためか、腹がちょっと出てきました。そこで、相部屋の[redacted]さんが、伴走をしてくれるというので、往復 5km を毎日走ることにしました。始めは、息はハーハー、汗はダラダラという状態でした。１週間ぐらい走ったところで、「北川村の運動会で走らないか」と言われました。運動会では、800m を走ったのですが、みんなから 100m ぐらい離されて、やっとゴールできました。運動不足を痛感しました。結果的には、これが運動を続ける原動力になりました。大分県の発電所に転勤になり、そこで、本格的に長距離に挑みました。県体にも出場でき

地区の駅伝の常連選手にもなりました。

被爆したことに悲観しないで、上手に身体と付き合うことを、マラソンを走ることから学びました。資格取得にも、ねばり強く勉強しました。スポーツは人と競争するものだと思っていましたが、自分との競争に勝つことが、まず必要だと思いました。

大分県被団協の皆さんは、戦時中であったため、中学卒業を待って、広島や長崎に動員された方がほとんどです。その人たちが、80歳を超え身体が不自由になってきています。現在、私は72歳ですが、運動をしてきたため、身体が比較的元気です。80歳をこえて、被爆証言が、もう出来ないという先輩に代わって、若い世代に、被爆証言を続けていきたいと思っています。

「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成26年（2014年）[redacted]月[redacted]日

ふりがな ニシ ウタ スエ オ 氏　名 西内末男 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	生年月日・年齢 [redacted]
現住所・連絡先 〒[redacted]	
電話 [redacted]	FAX [redacted]

（聞き取り代筆した方の連絡先）

ふりがな 氏　名 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	電話（　　）　－ FAX（　　）　－

※　上記に記載された個人情報の取り扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

（被爆当時の状況）

当時の年齢	16 歳	性 別	男 ・ 女
当時の職業・学年等（できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい。） 69年前の8月6日あのピカドンで被爆しました。当時広島第2中学校4年生の学徒動員で 中観吉町 三菱重工業株式会社の鋼板工場で 1日8時の 日給で働いて感じです。思い出せば あの朝空襲警報のサイレンの音で 工場へ行くのは 間合せて 居ました。が 間もなく解除に成り 結局そのまま 三菱重工場へ行き 8時15分 作業にかかる 瞬間ピカと 工場内が ものすごく明るく成り エッ!! 今の光は何 と 私の居る後方 …→ 裏面へ			

※　被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際等に、公開します。

※　この応募用紙に、被爆体験談（様式不問）を添付してください。

※　提出された書類は返却いたしません。

工場の北側に大きな出入口が有りましたので そこへ走り寄り
目玉は見えた物は 今まで見た事も無い どぎつい色の大きなあいボールの
様な雲が空中にぽかっと浮いて見えた。アレ!!何と級友達に声
をかけ様と思った瞬間 爆風で吹き飛ばされ ~~工場内~~ た。
気が付いて当りを見廻せると 屋根瓦のスレートは1枚も無く全部吹き
飛ばされ 工場内は明るいのに驚いた。それから間も無くして学徒は
工場外へ避難せよとの命で 級友と二人 己斐方面へ川を渡り避難した。
現在のコウゴ橋当りでは無いかと。そして山に登り広島市内を一望出来る
所まで来た。夏の海風で南から北へと風が吹くので黒い煙で全く見えません
でした。夕方旧2号国道を西から東へと電柱をまたぎ電線をかわし
比治山橋まで帰って来た そこで下宿のおばさん [redacted] さんと会い元気で居た
事を喜び合って別れた。翌朝私は海田駅まで歩き豊田郡川源村、
[redacted] 父が歌へ大書院帰省した。

1発の原子爆弾で広島市が壊滅し人命がそして財産が失われ
賢人のやる行為では無いと私は思います、級友は今がと叫び
私は白内症で悩んでいる 来年70年目の被爆者・広島・長崎から
世界へ平和を祈ります。